

サリナスバレーにおける野菜栽培と サラダ加工会社の広域的展開

斎藤 功* 矢ヶ崎 典隆**

Industrialized Vegetable Production, Salad Processing, and Agribusiness in Salinas Valley, California

Isao SAITO * and Noritaka YAGASAKI **

Abstract

Salinas Valley, California, is the leading lettuce-producing area in the United States. Production, processing and marketing of vegetables based in Salinas Valley are typical of the industrialized farming in the United States. This article intends to depict the dynamics of American agriculture by examining the activities of agribusiness with special reference to farming practices, land use, salad processing, and labor. Field studies were conducted in Salinas Valley and Imperial Valley.

Production of lettuce in Salinas Valley began in the early 1920s when ice-packed lettuce began to be shipped by rail to the eastern market. Lettuce growers originally marketed lettuce in the spring, summer, and fall from Salinas Valley. From the mid-1920s they began winter harvesting of lettuce in the dry areas of southern California and Arizona, typically in Imperial Valley and Yuma Valley. With the completion of the California Aqueduct, Huron in the western part of San Joaquin Valley grew as a new lettuce-producing area in the 1970s to supply lettuce in April and October. The system of year-round production of vegetables was thus established in the 1970s. Outside capital was invested in Salinas Valley during this period to promote the agribusiness venture of lettuce production and marketing. Some growers shifted to processing ready-pack fresh vegetables in the 1980s by establishing large plants in Salinas Valley.

The system of year-round supply of vegetables in Salinas Valley, Imperial Valley-Yuma Valley, and western San Joaquin Valley makes this part of the United States the leading producer of fresh vegetables in the world. Differences in climatic conditions, modern technology for preserving and transporting fresh vegetables, influx of large amounts of capital, availability of cheap labor, and improved infrastructure have combined to create this production complex. It plays an important role in the global supply of fresh vegetables as the produce is consumed not only in North America but also in Europe and Asia, including Japan.

* 筑波大学大学院生命環境科学研究科地球環境科学専攻

** 東京学芸大学地理学研究室

* Division of Geoenvironmental Sciences, Graduate School of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

** Department of Geography, Tokyo Gakuhei University

Key words : Salinas Valley, ice-packed lettuce, seasonal shift and year-round production, ready-pack fresh vegetables, salad packing plant

キーワード : サリナスバレー, 氷詰めレタス, 地域分担と周年生産, 生鮮パック野菜, サラダ加工会社

I. はじめに

アメリカ合衆国における野菜生産は都市近郊や気候の適地で行われてきた。前者の代表がニュージャージー州で、後者の代表がカリフォルニア州である (Gregor, 1969)。カリフォルニア州における野菜生産, 特にレタス生産は, スタインベックの小説『エデンの東』 (Steinbeck, 1955) にあるようにアメリカ東部との結びつきから発展した。その舞台となったサリナスバレーはアメリカ最大, いや世界最大の野菜産地である。近年, トラック輸送の発達や保冷装置の改善に伴って, 消費市場からは遠隔であるが気候に恵まれたカリフォルニアの野菜生産はますます重要性を高めている。カリフォルニアの野菜は年間を通して収穫され, 国内市場ばかりでなく, 外国にも輸出されている。

このような野菜生産の発展は, 流通システムの整備とともに, 農業の工業化とアグリビジネスの台頭の結果である (矢ヶ崎, 1990)。アメリカ農業はアグリビジネス化の傾向をますます強めており, それは企業の穀物農業や食肉産業において顕著にみられる現象であるが (斎藤・矢ヶ崎, 1998; 斎藤ほか, 2000), 野菜生産においても同様である。このような視点からカリフォルニア州の野菜生産, 特にレタス生産を検討することによって, アメリカ農業の特徴を動態的に明らかにすることができる。同時にカリフォルニア州の地域性を描き出す際に, アグリビジネスによる野菜生産は重要なテーマである。

サリナスバレーのレタス栽培を地理学分野で本格的に取り上げたのは Dorel (1975, 1978) である。彼女はサリナスバレー内でも北部のカストロビル市周辺のアーティチョーク栽培, サリナス市周辺のレタス栽培, 南部の甜菜栽培, 山麓部の葡

萄栽培という地域分化を明らかにしたばかりでなく, サリナスバレーの生鮮野菜栽培がカリフォルニア州のインペリアルバレーやアリゾナ州のユマ地区との季節分担によって行われていることを明らかにした。しかも, これらがカリフォルニアコースタルファームズ社, バッドアントル社, インターハーベスト社などのアグリビジネスの戦略で行われていることを解明したことは高く評価できる。また, Fitz-Simmons (1986) も Dorel の研究に依拠しながら, サリナスバレーにおける企業の出荷業者が小生産者を系列化し, 耕作地を賃借して工業的農業を営むという野菜生産過程の集約化と地域経済の再編が進展したと指摘している。

一方, 矢ヶ崎 (1993) はカリフォルニア州の野菜・花卉栽培の多くが日系人によって行われている実態を報告するとともに, 農業産地形成において日系移民の果たした役割を明らかにしている。事実, カリフォルニア州の農業生産を支えてきたのは, 低賃金で働く農業労働者である。それぞれの時代に中国系, 日系, フィリピン系, メキシコ系の人々が収穫などの農業労働にあたった。特に機械化の難しい野菜の収穫では, 今日でもメキシコ系が重要な役割を演じている。カリフォルニア州のアグリビジネスを論じる場合, 農業労働力は極めて重要な課題である。

夏にサリナスバレーを通過すると, 青々とした野菜栽培の風景に圧倒される。それはセントラルバレーなどの果樹栽培や周辺の乾燥した褐色の山地と対照的な景観だからである。サリナスバレーでは, モントレー湾から入る冷たい海霧の影響で周辺より温度が低く, 低地でも夏に露地野菜栽培が可能なのである。事実, サリナスバレーに加え, 夏に野菜栽培が行われているのはカリフォルニア中部太平洋岸のロスオロスバレー (サンルイ



図 1 調査対象地域

Fig. 1 Study area.

スオビスポ郡), サンタマリアバレー(サンタバーバラ郡), プリザントバレー(オックスナード郡)等, 海霧の影響を受ける地域に限られる。野菜栽培はサリナス市の北ではカストロビルを経てサンタクルズ郡のワトソンビル(パハロバレー)まで, 南は幅 15 ~ 20 km のサリナスバレーにおいてもゴンザレス, ソレダッドを経てキングシティまで(図 1), それ以南は加工用ブドウの栽培地となる。垂直的にみると野菜栽培地は平坦な谷底部を占め, そこから山麓緩斜面の標高 200 m 付近まではブドウが支配的となり, それ以上の標高では海霧の影響が少ないので乾燥した放牧地となる。

私たちはサリナスバレーの野菜栽培が, 日本におけるやませを活用した東北地方の野菜栽培や花卉栽培に環境的に類似していること(斎藤, 1982, 1991)に関心を持ち, 継続的に景観観察を続け, 現地調査を実施してきた。その結果, Dorel が調査した 1970 年代以降, サリナスバレーを中心としたカリフォルニア州のレタス生産がダイナミックな変化を経験し, アグリビジネスは合併・吸収等によって大規模化し, 企業化の傾向を強めていることが明らかになった。「サラダパック」のようなカット野菜の流通は, Dorel が調査した 1970 年代にはみられなかったものであるが, 今日ではカリフォルニア州の野菜の販路拡大において戦略的な役割を演じている。さらに, カリフォルニア州の野菜生産はグローバル市場において重要性を増している。

II. 移民と野菜産地の形成

1) 移民の流入と農業

カリフォルニアの農業は, スペイン・メキシコ時代, ゴールドラッシュ期, 商業的小麦農業・果樹野菜園芸の発展期(1870 ~ 1910 年), 農業の工業化時代(1910 ~ 1945 年), アグリビジネスの時代(1945 年以降)の 5 段階に区分されるという(Jelinek, 1979)。それをサリナスバレーの農業に適用すると, 1822 ~ 1848 年はスペイン・メキシコのランチョ時代といえる。ランチョサウサル(10,242 エーカー), ランチョナシオナル(6,633), リンコーンデルサンヒオン(6,667)というように広大な面積の賦与地があった。ランチョでは自給用のさまざまな作物が栽培され, 毛皮や獣脂をとるため多くの牛や羊が飼育され, 少しの馬でそれらを管理した。1849 年にゴールドラッシュが始まると, これらのランチョから肉牛が生きたまま鉱山に移出された。したがって, サリナスバレーは 1860 年頃まで牧畜時代であった。

1853 年にジェームズ・ヒルがランチョナシオナルを購入し, モントレー郡で最初的小麦の大規模栽培者になった。小麦の栽培面積は, 1869 年には 6 万エーカーを超え, 1872 年から 1881 年には 9 ~ 11 万エーカーに達した(Breschini *et al.*, 2000, 194)。パハロバレーやサリナスバレーで小麦の収穫や農地の開墾に従事した農業労働者には, 1869 年のセントラルパシフィック鉄道の完成で鉄道会社から解雇された中国移民が多かった。一方, 19 世紀末にはデンマーク人がクアラ

周辺に入植し、小麦と大麦を栽培した。

1850年のオーストリー併合に伴い、1870年代にはイタリア系スイス人が渡米し、本郡のゴンザレス、ソレダッド、グリーンフィールドに定着した。彼らは故郷の生業であり、小資本でも可能な酪農を始め、牛乳からはバターやチーズが製造された。また、1900年代にドイツ系スイス人が流入し、アルプス牛乳社が創設された。モントレイ郡における酪農のピークといわれた1924年には酪農家数が400戸以上存在し、25,400頭を搾乳するまで発展した。したがって、サリナスバレーでは1920年代まで酪農が最も重要な産業といわれた(Anderson, 2000)。このようにサリナスバレーでは、入植当初から移民の住み分けと独特な農業経営がみられた。

2) 製糖工場の建設と甜菜栽培

ハワイの製糖業で成功したスプレックルズ氏は、モントレイ郡とサンタクルズ郡の境にあるパハロバレーに注目して、1888年に西部甜菜糖会社を設立し、1889～1903年操業した。これは、ヨーロッパで確立した甜菜糖産業の技術が導入され、アメリカ合衆国の製糖業が確立した時期でもあった(矢ヶ崎, 2000)。彼はサリナスバレーにも関心を払い、1895～1897年に6,888エーカーの土地を購入した。この土地の305エーカーを工場敷地として1897～1898年に製糖工場が建設された。1899年に操業を開始したこのスプレックルズ工場は1日3,000トンの甜菜を処理し、400トンの砂糖を生産する世界最大の製糖工場といわれた。この工場がフル操業を行うには3万エーカーの甜菜栽培地が必要であったので、会社は工場に隣接して第1農場(7,942エーカー)、ソレダッドの南に第2農場(1,200)、キングシティの北に第3農場(11,906)を所有した。第1農場は、70エーカーずつに区画され小作に出されたが、第2・3農場は会社の直営農場であった。甜菜は専用貨車でサザンパシフィック鉄道や専用線を通り工場に運ばれた¹⁾。これはいわば、南米におけるサトウキビプランテーション方式の製糖工場を想起させ(矢ヶ崎・斎藤, 1992)、農業の工業化を反映させたものといえよう。

1898年に日本人移民約200人がモントレイ郡にやってきて、多くはスプレックルズ製糖工場に雇用された。彼らは工場の周辺の70エーカーの小作地を割り当てられ、懸命に働いたので歓迎された。しかし、勤勉な日本人は小銭を貯めて農地を購入するようになったので、次第に警戒されるようになった。1913年にはカリフォルニア州外国人土地所有(制限)法が施行されたし、1924年移民法は帰化不能外国人の入国を禁じたため日本人排斥法と呼ばれた。それでも、1941年日本人はカリフォルニア州の園芸作物の41%を生産するといわれた(矢ヶ崎, 1993)。太平洋戦争が始まると1942年に日系移民は強制収容されたが、戦後、解放されてサリナスバレーに戻ったものも多い。中には、手間がかかり高度な育種技術を要するイチゴ栽培、花卉栽培および野菜栽培で成功している日系人もいる²⁾。

モントレイ郡では甜菜は1964年の31,900エーカーを頂点に1981年まで1.5万エーカー前後栽培されてきたが、1982年以後みるべきものがなくなった。これは、甜菜がレタス等の野菜に比べると価格が安く、肥沃な土地で甜菜を栽培することの非経済性が強調されたためである。1981年に製糖工場の閉鎖されると、農場は小作人に分譲されたり、分割販売された。

3) 野菜の出荷とアグリビジネス

1. レタスの出荷と製氷会社

アメリカの野菜の代表であるレタスは、当初ロサンゼルス地域で生産された。すなわち、1920年における農務省の統計によると、ロサンゼルス郡からの移出量が4,037貨車、インペリアル郡2,940貨車、サリナス-ワトソンビル90貨車であった。

パハロバレーでレタスが栽培されたのは1915年で、翌年にはサンフランシスコのガリン社に出荷された。1922年にカリフォルニア野菜連盟の営業員が、サリナスバレーの12生産者と契約してレタスを175エーカー栽培した。1エーカー当たり600ドル(当時の地価よりも高い)の収入を得た生産者がいたので、これがサリナスバレーにおけるレタス栽培ブームのはじまりになった。

1923年にはいくつもの野菜の出荷施設が建設され、137貨車が出荷された。この大量出荷を可能にしたのは、金融機関の補助と冷蔵貨車の使用であった（Anderson, 2000, 107）。

1,265貨車のレタスが移出された1924年は、レタス・ビジネスが確立された年といわれるが、それはトレイシーワルドロン社などの出荷会社が確立したことを意味する。1930年には60の出荷業者によって野菜栽培出荷連合会が組織されるまでになった。その会員には、1924年にトレイシーワルドロン社に入り、1933年にブルースチャーチ社を設立したブルース・チャーチをはじめ、ダリーゴ社、メルリ出荷社等があった。これらの出荷業者は自らが大規模農業経営者であったり、契約栽培で大面積のレタス栽培地を確保するものが多かった。なお、1930年にモントレイ郡におけるレタス栽培面積は5万エーカーに達していた³⁾。これらのことは、サリナスバレーのレタス栽培が当初からニューヨークを中心とした東部市場と結びついた出荷業者、つまりアグリビジネスとして発展してきたことを物語るものである（写真1）。

レタスの出荷に氷がはじめて使われたのは1917年であるといわれ、1919年にはニューヨークへの氷詰めレタスの出荷が試みられたが、この事業は失敗した。1922年からサリナスバレーでレタスの出荷に使われた氷は、1914年に設立されたサリナスバレー製氷社によって供給された。1929年にはユニオン製氷社が設立され、1930年にはモントレイ郡製氷社がワトソンビルに設立された。1936年にはマウンティン製氷社がサリナスに建設され、1937年にはグローワーズ製氷社がブルースチャーチ等によってサリナスに設立された。一般に冷蔵貨車には、13.6kgずつの箱詰め氷に加え、一台当たり4.8トン底面氷と9.1トンの覆い氷が必要であった。この大量の水を供給する製氷会社は、戦後までにサリナス市に5か所存在した。これらの製氷会社はすべて鉄道に接するレタスの出荷施設とほぼ同じ場所に設立された（Anderson, 2000）。したがって、サリナスバレーにおける野菜栽培はブルースチャーチ社のよ



写真1 サリナスバレーのレタス栽培（2003年7月8日）。

レタスはサリナスバレーの商業的野菜栽培の嚆矢で、代表的な作物である。

Photo 1 Lettuce cultivation on the Bruce Church ranch in Salinas Valley.

うに最初から鉄道、出荷業者、製氷会社が結びついたアグリビジネスとして成立したのである。

2. 早くから広域展開した野菜出荷業者

サリナスバレーではレタスが、一毛作に加え、年2回収穫された。それを組み合わせることにより春、夏、秋の出荷が可能となった。サリナスバレーのレタス栽培が軌道にのると、出荷業者は早くも1920年代末に冬季に出荷できる野菜を求めてその先進地域であったインペリアルバレーやユマバレーに進出した。インペリアルバレーでは、キャンターロープメロンが有名になった直後の1911年、オハイオ州シンシナティに本社のあるジラード社が進出し、4,500エーカーの土地を購入するとともに、6,000エーカーを借地し、レタス、エンドウ、カリフラワー、キャンターロープ、ニンジン等を栽培・出荷した。同社は合衆国の多くの州で合計3.5万エーカーの土地で野菜を生産・出荷する会社であった。また、アメリカンフルーツグローワーズ⁴⁾等も活躍していた（Tout, 1931）。これらのインペリアルバレーの野菜出荷業者は、夏季の野菜を求めてサリナスバレーに進出した。1920年代から1930年代には彼らの方がサリナスバレーの出荷業者より多かったといわれる（Anderson, 2000）。

サリナスバレーの出荷業者が冬季のレタスを求

めてカリフォルニア州南部やアリゾナ州の砂漠地帯に進出したのは1920年代の半ばからである。ガリン社は1924～1925年にアリゾナ州のソマートンに、ブルースチャーチ社も1927年にユマに進出し、レタス栽培を行った。また、サリナスバレー野菜交易社とガリン社は、それぞれ1931～1932年、1935年にインペリアルバレーのエルセントロに事業を展開した。ダリーゴ社も1930年代末にブローレイに進出してブロッコリーを栽培した。

1930年代はサリナスバレーとインペリアル・ユマバレーという2か所でのレタス出荷が一般的であったが、両者の間隙を埋める10～11月と3～4月に出荷できる産地の開拓も行われた。そのひとつはアリゾナ州のフェニックスであり、サリナスバレー野菜交易社が1931年からレタス栽培を開始し、1940年代には一般的となった。1950年頃から真空冷却とダンボールの出現によって出荷施設に規制されなくなったので、アリゾナ州では1960年代に完成したアリゾナ中央灌漑水路に沿ったメーサ、カーザグランデ、バッキー、マラナに野菜産地が拡大した。ブルースチャーチ社はフェニックス近くのスコットデイル先住民居留地で秋レタスを栽培した。1960年頃、アリゾナ州のコロラド川先住民居留地が25年間の賃貸契約で解放された。ブルースチャーチ社は6,400エーカーを借りてパーカーを拠点に開墾し、綿花、レタス、アルファルファを栽培した。同様に、ガリン社、サハラ出荷社も進出した（Anderson, 2000）。なお、レタスの出荷には専ら松材の木箱が使われてきたが、1952年バッドアントル社の開発した真空冷却方式が採用されると、包装は木箱からダンボールに変わり、軽量化、小型化した。しかも、真空冷却方式は水を必要としないので、セロファンラップの普及と相まって畑での包装を可能にした。

1970年代のカリフォルニア大灌漑水路の完成によって、従来セントラルバレーの中央部のメンドータやファイアボーで行われていた野菜栽培が西側に移動した。土壌、気候、灌漑水路の点から特にヒューロン地区が4月および10月の出

荷地として注目されることとなった。そこからサリナスバレーのサラダ工場へは1時間内外で輸送できることもレタス栽培が集中する一因であろう。なお、レタスのトラック輸送は1957年の24%から徐々に増加し、1970年には50%となり、1975年には75%となった（Federal-State Market News Service, USDA, 1975）。包装の小型化と保冷車の開発と改良が今日のようにトラック全盛時代をもたらした。

III. 野菜生産の変化とアグリビジネス

1) 野菜生産の変化

ここで、サリナスバレーにおける野菜生産の推移について検討しよう。図2はモンレー郡における1950～2000年にわたる作物栽培面積の推移を示したものである。レタスは、一時大麦に凌駕されたが、最大の面積5万～7.3万エーカーの間で推移しており、サリナスバレーを名実ともに代表する野菜である。近年玉巻きレタスは減少気味で、2000年には57,800エーカーであった。それに代わって台頭してきたのが白菜に類似したロメインレタスである。ロメインは1992年に1万エーカーを、1996年に2万エーカーを超え、2000年には33,000エーカーとなった。ロメインが急速に増加したのは、前述のようにカット野菜やサラダ用として需要が増大し、価格もよかったからである。また、レタスの中でもサラダに適したグリーンリーフ、サニーレタス、縮れ葉レタス、エスカローレなどが2000年にそれぞれ8,800, 4,150, 1,860, 290と合計15,100エーカー栽培され、ロメインを合わせ、レタス全体では10万エーカーを超えている。この面積は日本最大のキャベツ産地である婦恋村の2,000haの21倍に相当する。

レタスに次ぐ作物は6万エーカーを超えたブロッコリーである。ブロッコリーは1950年に6,580エーカーであったが、1970～1980年代に急増し、1984年に5万エーカーを超えた。濃緑色のものばかりでなく、紫色のブロッコリーも現れた。さらに、ブロッコリーの一種で、茎がいくつにも枝分かれし、その先に花芽を持つラビニも

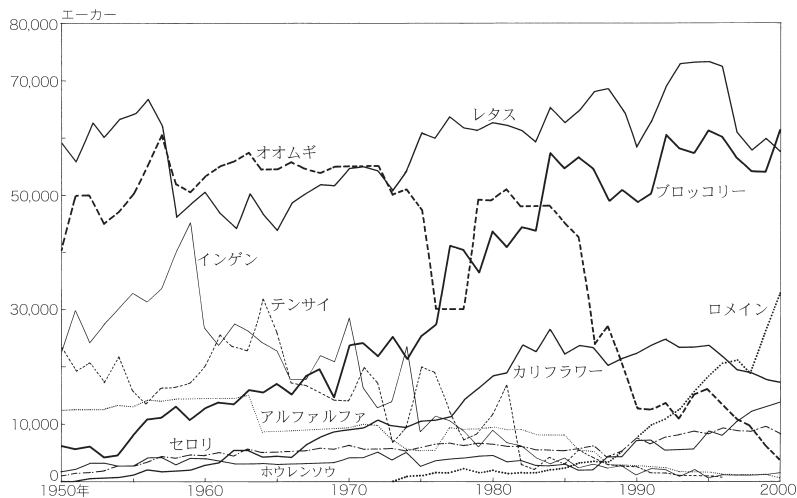


図 2 モントレー郡の野菜栽培面積の推移。
Agricultural Commissioner, Monterey County の Crop Report による。
Fig. 2 Change of planting acreage of vegetables in Monterey County.

2,650 エーカー栽培される。一方、カリフラワーはセロリー、ホウレンソウと肩を並べて推移したが、1960 年代後半に増大し、1982 年から 2 万エーカーを超えた。しかし、1990 年代後半に減少し、2000 年には 17,480 エーカーとなった。また、セロリーはホウレンソウを凌駕し、1968 年以後 5,000 ～ 8,000 エーカーで推移したが、近年 13,800 エーカーを記録したホウレンソウに追い越された。

図 2 に表現できなかったが、サリナスバレーでは多くの種類の野菜が栽培されている。日本における高原野菜の代表であるキャベツは、2,495 エーカー栽培されているに過ぎない。ところが、アーティチョークは 1970 年から 1974 年まで 1 万エーカーを超えていたが、以後 7,000 エーカー前後で推移する。アスパラガスは 2,000 ～ 4,000 エーカーで推移し、2000 年には 4,239 エーカーであった。さらに、同年における他の野菜の栽培面積をみると、1,000 エーカーを超えるものにラティチオ、ピーマン、ネギ、ケイル、トマト、タマネギ、パセリーがあり、500 エーカーを超えるものに青梗菜、エンダイブ、アニス、シラントロ、スイスチャド等がある。これらは、カット野

菜やサラダ用野菜の需要に答えるために栽培されるようになったものである。特にラディシュ（アカカブ）、スイスチャドは赤色を、アニス、シラントロは白色を強調する野菜であり、パセリー、青ネギはセロリーなどとともに香りを提供する野菜である。

サリナスバレーにおいてレタスは 12 月から 7 月までが植付期間、4 ～ 10 月が収穫期間である。すなわち、12 ～ 3 月に植付けたレタスは 4 ～ 6 月に収穫され、その後の 7 月に植付けたレタスは 9 ～ 10 月に収穫される。このレタスの二期作に加え、この間に植付け・収穫されるレタスを合わせると 4 ～ 10 月という連続的収穫が可能であり、結果的に延べ作付け面積は 10 万エーカーと多くなる。レタスの一種ロメインは作付け期間が 11 ～ 9 月、収穫期間が 1 ～ 11 月とレタスより長い。ブロッコリーもレタスより作付け期間が長く、1 年中作付けと収穫が可能であるが、サリナスバレーでは 4 ～ 10 月に収穫される。11 ～ 4 月に収穫される野菜は、南カリフォルニア州の収穫物の方が品質的に優れているからである。一方、ホウレンソウは播種期間が 11 ～ 3 月、収穫期間が 1 ～ 5 月のものと播種期間が 7 ～ 8 月、収穫期間

が10～12月の二期作が一般的である。これに対し、アーティチョークは4～5月に播種され、9～2月に収穫される。また、多年生のアスパラガスは5年間連作されるものの、一般に播種は1～3月、収穫は2～6月である。このように夏冷涼なサリナスバレーでは夏酷暑となるサンホワキンバレーに比べ、夏でも野菜の栽培が可能であり、春と秋の2毛作が可能となるのである。

一方、インゲン類 (Dry beans) は、1959年には4.5万エーカー栽培され、1950～1965年にも2万エーカー以上作付けされていたが、1978年から1万エーカーを割るようになった。周知のようにインゲン類は豆科植物であるので、輪作体系に組み入れると土壌を肥やす効力があり、野菜の連作障害を弱める効果があった。しかし、野菜の2期作あるいは2毛作が一般化しているサリナスバレーにおいては、播種が5～6月、収穫が8～9月という典型的な夏作物であるインゲンや、アルファルファのような多年生作物は、野菜との競合に敗れ、消失の運命にあったのであろう。それに対し、大麦は1957年の60,800エーカーを最高に、5万エーカー以上の面積が1954から1974年まで続いたし、4万エーカー台が1986年まで維持された。その後急減し、1990～1997年は1万エーカー台となり、2000年には3,830エーカーとなった。小麦は大麦より早く、ほぼ同じ運命をたどった。豆類に比べ大麦・小麦が遅くまで残ったのは、それらが連作障害を弱める禾本科作物であり、10～11月に播種され5～6月には収穫される冬作物であったので、その後地に夏野菜を栽培・収穫することが可能だからである。結果的に、かつてのサリナスバレーを特色づけたビート、麦類や豆類は土地利用の競合に破れたといえる。

2) 土地利用と野菜生産農場

ここで、土地利用と土地所有の関係をサリナス市の南16 kmにあるゴンザレスを対象として検討しよう。調査地域はサリナス川を挟むように扇状地性の平坦な農地が広がる場所であり、標高40 mのゴンザレス市とその北東部を占める。土地利用調査は2001年8月5・6日に実施した

(図3a)。それによるとブロッコリーとレタスが支配的な作物で、カリフラワー、セロリー、キャベツ、ロメイン、アスパラガスがそれに次ぐ。また、土地利用図に表現できない多種類の野菜が栽培されていたが、それらの中では収穫期に当たっていた葉ネギとケイルが目立った。

前述のようにサリナスバレーでは一般に春野菜と秋野菜の二毛作が行われているが、調査時点は両野菜の合間の時期に当たるので、収穫される野菜と同じものが隣の畑で植付けられたばかりのものや作付け前地も目立った。作付け前地とは、収穫した後に耕起・整地し、次の作物を植付けるよう準備した土地のことである。事実、ブロッコリー、レタスと表記したものの中にも植付けしたばかりのものもあった。しかし、カストロビルやサリナス市周辺でみられたアーティチョーク、アニス、イチゴ、花卉栽培はみられなかった。

これらの野菜に次いで面積の広いものに加工用ブドウとサボテンがあった。この耕地の最上部は標高160 mで、サリナス川左岸の段丘崖の上のワイン用ブドウ園(40～160 m)に標高的に対応する。この土地利用は、平地部が濃い霧であっても山麓部は晴れという海霧の進入特性を反映したものである。サボテンも乾燥へ対応したものであり、花を咲かせるつぼみは果実として食用されるばかりでなく、多肉系の葉はメキシコ系料理に使われる (Raup, 1936)。

一方、畜産を行っている農家が2軒あった。1軒は旧馬車道の突き当たり、ゴンザレスの市街地北部にあるマルチンナヴィ酪農である。この酪農家はかつてアルプス山麓出身者による酪農が盛んであった頃の名残である。というのは、所有地の多くには野菜が栽培されていたからである。もう1軒は、山麓部にあるファットシティ畜産社のフィードロットである。このフィードロットは1972年(土壤保全局撮影)や1992年の空中写真と比べて規模が小さくなり、野菜畑の進入やダチョウ飼育場の併設も認められた。しかし、2003年の8月に訪れた際には肥育牛が増え、ダチョウの飼育場はなくなっていた。

次に、郡農業委員会の編集になる耕地地図に示



図 3 ゴンザレスの土地利用 (a) と土地利用者 (b).
現地調査による。

Fig. 3 Land use (a) and land user (b) in Gonzales.

された土地利用者と土地利用を比較しよう。土地所有者はロードシルバ、カーザレアレスブドウ園、ファヌーランチ、モリソリなど古いイタリア系の地主が多いが、利用者はダリーゴ社、コストファームズ社、シルバファームズ社、V&Vファームズ社、オレジア社等の農企業（アグリビジネス）によって大規模に利用されていた（図 3b）。野菜生産が借地経営によってアグリビジネスとして大規模に行われているのはカンザスの小麦地帯と類似している（斎藤ほか, 2000）。

ここで土地利用図の多くを占めるダリーゴ社についてみよう。サボテンの栽培されていたところはカーザレアレス氏からの借地であり、ブドウ園

からサボテン、レタス、ブロッコリーに変わったことがわかる。また、ジョンソンキャニオンロードの南北の耕地は所有・利用ともダリーゴ社の直営農場である。ここでもブロッコリーとレタスが主要な土地利用であった。この農場は、ダリーゴ社の 20 ある農場のうちの第 7 耕地にあたる。同社が農業委員会に提出した 2003 年度の作付け計画書によると、同社は延べ面積で 19,087 エーカーの野菜を栽培し、この第 7 耕地では 3,082 エーカーが栽培されている。すなわち、この農場の特徴はサボテンの実 156 エーカーで、最大の土地利用はリーフレタス (1,297 エーカー)、ブロッコリー (871)、ラピニ (352)、エン麦・ラ

イ麦（183）、未利用地（100）であった。ラピニはブロッコリーの一種であるから、レタスとブロッコリーが1,200 エーカーを超えることになり、2年間の時間差はあるものの土地利用調査と一致する結果となった。

次いで、土地利用図に一部しか含まれていないが、V&V ファームズ社の土地所有と土地利用を検討しよう。同社の所有地はゴンザレスの州間高速道路とサザンパシフィック鉄道に挟まれたゴンザレスの町の北側にあるが、事務所は鉄道の反対側にある。所有地がヴィオリニ氏、事務所のある土地はヴィオリニヘロルド氏からの借地であることはV&V ファームズが同族会社であることを意味する。なお、ヴォスチ氏からの借地を含めゴンザレスの市街地周辺にはアスパラガスが栽培されていた。V&V ファームズ社は7耕地で8,909 エーカーの野菜を生産するアグリビジネスであるが、最も多いのはレタスの1,280 エーカー、キャベツ(880)、セロリー(870)、アスパラガス(810)となる。次いでカリフラワー、リーフレタス、ブロッコリーも500 エーカー以上栽培されていた。レタスとブロッコリー類が中心のサリナスバレーにおいてV&V社はアスパラガスとホウレンソウ(390)に特化した会社といえる。なお、同社は野菜加工会社ニュースター社と専属契約で野菜を栽培しているが、同社のレタス畑で会った現場監督によるとレタス、ブロッコリー等の収穫は加工業者があたるという⁵⁾。

なお、土地利用図の範囲内にあるコストファームズ社の場合はダリーゴ社と同様、ブロッコリーとレタスが卓越するが、ロメイン、カリフラワー・キャベツおよびムギとケイルもみられた。また、シルバファームズ社ではブロッコリーが支配的であるが、キャベツ、セロリー、ネギがみられた。さらに前述の酪農家の土地にもブロッコリー、カリフラワー、セロリーが認められた。いずれにせよ、野菜栽培は大規模なアグリビジネスによって担われていることが判明した。

3) 野菜栽培の多様化と出荷先

1. メリルファームズ社

メリル社の創業者 T.R. メリル氏は 1930 年に

設立されたサリナス野菜生産出荷組合の創立メンバーであり、1931年にはメリルパッキング社の記録が残されている。サリナスバレーのレタス栽培の揺籃期には生産者自らが野菜の出荷業者であったからである。メリル氏は1946年に成立した野菜生産出荷社の創立メンバーでもあったが、1940年代、1950年代の商標であるメリル社の固有のラベルが残っているので、メリル社は少なくとも1960年頃までは野菜出荷業者であったのである。本社のあるメリル通りには多くの出荷業者や加工会社の事務所や倉庫が集中的に存在していることもその証であろう。

1960年代における野菜の出荷施設の装置化と収穫機械の大型化が野菜の生産と出荷・加工部門への分化をもたらしたが、メリルファームズ社は野菜生産部門へ特化した。現在、メリルファームズ社は8つの耕地にわたり、3,750 エーカーの土地を経営しているが、自己の所有地は150 エーカーに過ぎない、典型的な借地経営である。8つの耕地のうち、自耕地はサリナス川左岸にあり、ジャックランチ(520 エーカー)とトロランチ(150)に隣合っている。サリナス市周辺にはスプレックルズ(380)、モレラファームズ(360)、エアポート(420)がある。また、2つの耕地はサリナス川の左岸のゴンザレス(218)とソレダッド(1,550)にある。これらの耕地の総作付け面積は、7,898 エーカーと耕地面積の2.1倍に達する(表1)。つまり、少なくとも二毛作が行われ、時には三毛作も行われる。耕地別にみるとスプレックルズでは2.6回転であるのに対し、エアポートとソレダッドはそれぞれ1.46、1.93であった。

ここで、メリルファームズ社の作物ごとの栽培面積をみよう。玉レタス(2,142)、ロメインレタス(1,150)、葉レタス(890)のレタス3種で4,182 エーカーに達する。このレタス類に次ぐものがブロッコリー(782)、カリフラワー(585)、キャベツ(371)であり、アスパラガス(678)、セロリー(410)も見逃せない(表1参照)。メリル社はさまざまな会社に出荷してきたが、現在は生産物を専らドール社に出荷している。時にはリ

表 1 野菜生産農場の品目別野菜栽培面積.

Table 1 Acreage of vegetable cultivation by farms in Salinas Valley.

Farms	Merrill	Sea Mist	Boutonnet	Higashi	V&V	Bengard	T&A	D'arrigo
Broccoli	782	2,651	431	888	580	2,950	942	4,104
Cabbage	371	0	0	0	880	0	376	0
Cauliflower	585	2,350	1,204	608	665	505	1,049	784
Spinach	94	1,262	362	481	390	265	478	0
Lettuce leaf	890	1,237	840	1,023	620	690	1,056	6,711
L.Romaine	1,150	2,499	837	0	0	820	0	0
L.Head	2,142	1,256	1,267	798	1,280	1,625	2,478	1,826
Fennel	0	1,291	289	0	0	0	316	563
Oats & Rye	333	0	0	0	0	15	617	634
Celery	410	2,547	378	426	870	95	545	0
Bean	300	0	0	0	135	0	5	0
Onion	30	0	0	425	260	0	10	0
Carrot	57	0	0	0	230	0	5	0
Asparagus	678	0	0	0	810	0	0	0
Artichoke	0	5,001	0	0	0	0	0	0
Napa	0	0	0	170	210	0	416	0
Strawberry	0	0	0	130	0	0	0	0
Tomato	0	0	0	0	640	0	0	0
Garlic	0	0	0	0	210	0	0	0
Bok choy	0	0	0	0	190	0	406	0
Endive	0	0	0	0	55	0	371	0
Kale	0	0	0	0	0	0	304	0
Parsely	0	0	0	0	0	0	306	0
Swiss Chard	0	0	0	0	0	0	281	0
Chicory	0	0	0	0	0	0	226	0
Mastard	0	0	0	0	0	370	262	0
Rappini	0	0	0	0	0	0	185	3,232
Cactus Pear	0	0	0	0	0	0	0	437
Others	20	0	0	0	93	0-	20	0
Uncultivated	56	179	65	205	466	170	241	796
Total area	7,898	20,273	5,673	5,154	8,584	7,505	10,895	19,087
Number of ranch	8	17	10	15	7	12	18	19

Agricultural commissioner の資料による.

Data from agricultural commissioner in Monterey County.

バーランチ社に出荷することもある。後述のようにドール社はフレッシュエクスプレス社とともにカット野菜の最大手出荷業者なので、メルル社が上述のような多様な野菜を栽培するのはサラダに必要な野菜需要に応えるためのものである。

メルルファームズ社は作物栽培に携わる農場労働者を 80 ～ 90 人雇用している。殆どがヒスパニックで、メキシコ人が最も多く、キューバ人やペルー人もいる。収穫はドール社やリバーランチ社が収穫クルーを連れてくるので、野菜の栽培・管理が仕事である⁶⁾。スプレックルズ耕地でセロリーの灌漑を行っていた労働者はフィリップピン人

で30年間メリルフームズ社で働いており（写真2）、子供達も独立してサンフランシスコ等で働いているという。このスプレックルズ耕地は最も肥沃で回転率も高いので、セロリーのような高度な栽培技術を必要とする野菜にはベテランの労働者に水管理をまかせているとのことである。

2. シーミストファームズ社とボートンネットファームズ社

カストロビル周辺にはアーティチョークが目立つ。アーティチョークとはアザミに似た草本の芯に延びた花蕾をいう。元々、アーティチョークはイタリア系移民のダニエル・ピエリ氏と従兄弟がサンフランシスコで1924年に設立したカリフォルニアアーティチョーク栽培会社が独占的に扱ってきた農産物である。この会社は口づてや手紙でニューヨークなどにアーティチョークを広め、1930年代にカストロビルに進出した。地元の野菜栽培農家アルフレッド・トッチーノ氏を巻き込み、戦前からブロッコリーをも扱い、1950～1960年代にファバー（豆）、エンドウ、カリフラワー、アニスにも手を広げた。この会社にはアーティチョークを栽培していたシーミストファームズ社（以下SMF社）とレタスとハウレンソウを栽培していたボートンネットファームズ社（BF社）が参画したのは、1962年のことであり、1983年にはサリナス市の東部に農地を有するベンガードファームズ社も参画した（Breschini *et al.*, 2000）。なお、同社は1995年にサリナスバレーの冷涼な海霧に因んで社名をオーシャンミスト社に変え、1997年カストロビルの工業団地の一角に設立した新社屋・工場に移った。

表1にはSMF社とBF社の野菜栽培面積が示してある。SMF社のアーティチョーク栽培面積は5,000エーカーと多いものの、ブロッコリー・カリフラワー（4,950）、レタス類（4,992）も肩を並べ、その半分を占めるセロリー（2,547）も無視できない。また、BF社もレタス類（2,930）とカリフラワー・ブロッコリー（1,635）が中心を占めるが、イタリア系の人々に好まれるフェネルやハウレンソウを作っているのが特徴であろう。これらアーティチョーク以外にも多様な野菜



写真2 サリナスバレーのセロリー栽培と畝間灌漑（2003年7月8日）。

伝統あるメリル農場の灌漑畑で、セロリーは手間をかけて栽培される。

Photo 2 Celery cultivation on Marrill Farms in Salinas Valley.

を栽培しているのも、親会社であるオーシャンミスト社の需要に応えるものであろう。すなわち、オーシャンミスト社は1980年代にはセロリー、レタス、ネギ、トウモロコシ、アスパラガスも扱うようになり、サラダ加工にも乗り出した。同社の新しい社屋には50名の販売・統括事務員と160人のサラダ加工労働者がおり、収穫作業には600人の農業労働者があたる。

図4は、カストロビル周辺におけるSMF社およびBF社の耕地分布を示したものである。農業委員会の資料（Agricultural commissioner, Monterey County, 1988）によると、SMF社は16耕地、BF社は10耕地を有しているが、図4にはその大部分が含まれている。しかも、SMF社の耕地はトッチーノ農場からの借地が多く、カストロビルを取り巻くように分布している。この2つの契約農場以外にもアーティチョークを栽培している農場もあるので、私たちにはカストロビルがアーティチョークの海に浮かぶ島のように思えた。事実、カストロビルは「世界のアーティチョークセンター」と呼ばれており、標高20mの洪積台地からカストロビル周辺の沖積地にかけてアーティチョークが卓越している（写真3）。

なお、図4にはサラダ加工施設を有するオーシャンミスト社の本社所在地も示してある。同社

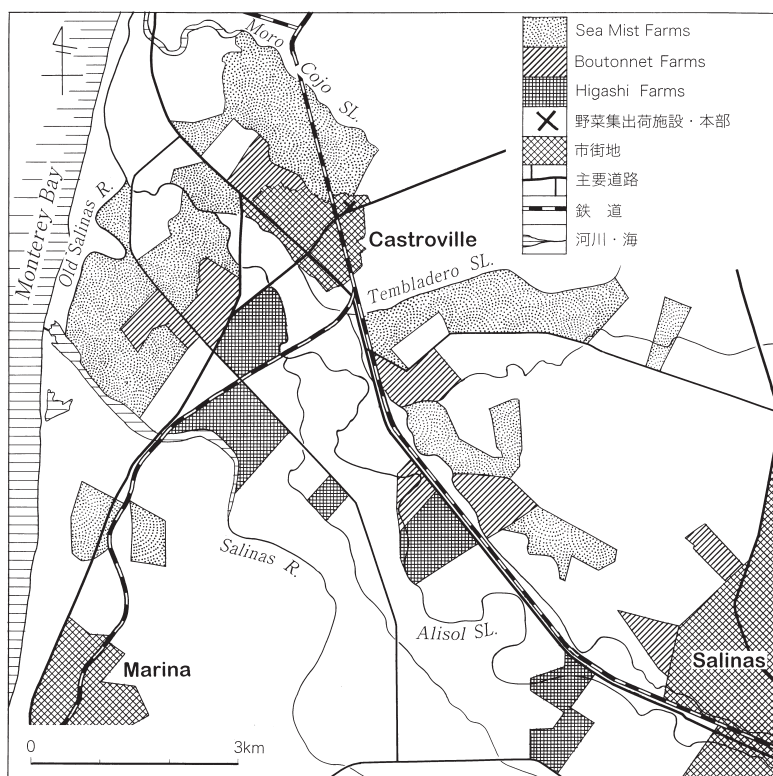


図 4 カストロビル周辺におけるシーミストファームズ社とボートンネットファームズ社の耕地分布。
Agricultural commissioner, Monterey County (1998): Ranch map による。

Fig. 4 Ranches of Sea Mist Farms and Boutonnet Farms around Castroville City.

はカストロビルを中心に事業を展開してきたが、サラダ加工に合わせ、ソルトン湖の北のコーチュラバレーに支社を持っている。これに加え、エルセントロ、オックスナード、サンタマリア、グリーンフィールド、ヒューロン、ユマに契約栽培地を有する。これによって、アーティチョーク以外にも多種類の野菜の周年出荷を可能にしているのである。

3. ニュースター社の存立基盤

ニュースター生鮮食品社は、野菜の生産者、出荷・加工業者が糾合して 1996 年創設された新しい会社である。野菜生産者の中にはヒガシファームズ社、V&V ファームズ社、メジャーファームズ社が含まれおり、出荷・加工業者にはセレス生

鮮食品があった。ここでニュースター社の存立基盤になった野菜生産農場について検討しよう。

ヒガシファームズは、農業委員会の資料によると 15 耕地で 5,154 エーカーの野菜を栽培しているので、約 2,500 エーカーの土地を経営していると推察される。耕地の利用は玉レタス・葉レタス (1,821) とブロッコリー・カリフラワー (1,496) が中心であるが、400 エーカー台のハウレンソウ、セロリー、青ネギ (Green onion) や白菜 (170) およびイチゴに特色がある。イチゴはワトソンビルやサリナスの市街地周辺に広がるが、それは労働力を多く必要とするものの収益率がよいためである。すなわち、普通の野菜は肥培管理に 1 エーカー当たり 700 ドルかかり、売上高は 2,800 ド



写真 3 カストロビル周辺のアーティチョーク栽培
(2004 年 7 月 22 日)。

冷涼な海霧を活用して栽培されるアーティチョーク
と海霧の名残り。

Photo 3 Artichoke cultivation on Sea Mist Farms
around Castroville.

ルが平均であるが、イチゴは経費がかかるものの
売上高は 10,000 ～ 15,000 ドルに上る。

ヒガシファームズも、他の日系人同様、世紀の
変わり目頃にサリナスバレーにやってきて、スプ
レックルズ製糖工場をはじめ多くの農場で働き、
1928 年に 38 エーカーの土地を、アメリカ市民
権を得ていたイケダ名義で購入したことに始ま
る。ヒガシ一家は強制収容後、サリナスに戻って
種々の助けを借りて農業を再開した。ジョージ・
ヒガシ氏は、戦前における日本人のリーダーで、
ヒガシファームズは当初の土地を含め、サリナス
市の西からゴンザレスにかけて広大な土地を経営
し、前述の野菜を栽培していたので、ニュース
ター社の呼びかけに答えて、その構成員になった
(Breschini *et al.*, 2000)。

一方、ゴンザレスにある V&V ファームズ社
は、前述のようにニュースター社の傘下にあるの
で、生産物はキャベツを除いて同社に出荷する。
さらにニュースター社と契約栽培するもう一つの
野菜生産農場にベンガード社がある。ベンガード
社はサリナス市の南東部に 12 の耕地を管理し、
延べ 7,500 エーカーの野菜を栽培している。主要
な野菜はブロッコリーで 2,950 エーカー (40%)
になる。次いでレタス (玉レタス 1,625, ロメ

イン 820, 葉 690), カリフラワー (505), セロ
リー (370), ホウレンソウ (286) となる。なお、
ニュースター社は前述のようにソレダッドとグ
リーンフィールドの間に 1,800 エーカーの土地を
所有するメジャーファームズと特約関係にあった
が、現在はベンガード社に変わった。ベンガード
社もかつてオーシャンミスト社と特約関係にあっ
た。このことは野菜生産農場とサラダ加工会社と
の結びつきも必ずしも強固ではなく、流動的であ
ることを示すものであろう。

ともあれ、ニュースター社は上記 3 社との特約
取引で合計 21,568 エーカーの野菜を確保する
ことになる。これがニュースター社の野菜需要を
満たす存立基盤であったが、同社は 2001 年オッ
クスナードに本拠を置くボスコビッチファームズ
社と協定し、両者の出荷施設を統合し、サリナ
ス、オックスナード、ユマの 3 つの施設から年間
を通じて野菜やカット野菜を出荷するようになった。
実際はニュースター社がボスコビッチファームズ
社のサリナス工場を買収し、ヴォスコビッチ
社は南カリフォルニアとメキシコの野菜生産に重
点を移すというものであった。かくて、ニュー
スター社は原料集荷の整備と販売網の整備をはか
り、ポパイブランドのホウレンソウに加え、サラ
ダ (ブランド名シーザー、コンチネンタル、コー
ルスロー) など付加価値の高いものに重点を置く
企業に成長した。

IV. サラダ加工会社の広域的展開

1) 野菜産業への大資本の進出

サリナスバレーで野菜栽培の広域展開をはか
り、成功していたのはブルースチャーチ社に加
え、インターハーベスト社とバッドアントル社で
あった。両者は野菜の出荷の安定化と周年化をは
かるため、南カリフォルニアに事業を拡大した。
すなわち、インターハーベスト社は 1972 年にサ
リナスバレー (7,600 エーカー), インベリアル
バレー (3,300), ユマバレー (900), ソルトリ
バーバレー (1,000) と全体で 12,800 エーカー
のレタスを栽培し、839 万箱を出荷する、サリナ
スバレー第 1 の会社となっていた。また、バツ

ドアントル社はサリナスバレー（6,200）、ヒューロン、インペリアルバレー（3,100）、アリゾナ州レッドロック（1,600）と全体で 10,900 エーカーを栽培し、679 万箱を出荷していた。しかも、この両社はサリナスバレーにおけるレタスの出荷量のそれぞれ 20.9%、17.3%を占めていた（Dorel, 1978）。したがって、両者は夏のサリナスバレーを基盤に、冬のインペリアル・ユマバレー、その合間の春と秋にアリゾナ州フェニックスの南のソルトリバーバレー等を活用してレタスの周年栽培を達成していたのである。

インターハーベスト社はニューヨーク資本で、中米に広大なバナナ農園を有していたユナイテッドフルーツ社が野菜部門に関心を持ち、1968 年にサリナスバレーのヌーネス社、アールマイアーズ社、デムコファームズ社を買収し設立したものである。1969 年にはストリッチアンドカントロ社とモントレイ郡製氷社も併合した。なお、ユナイテッドフルーツ社は 1968 年にエーエムケーコーポレーションに買収されたので、インターハーベスト社もその傘下となった。サリナスバレー第 1 の野菜出荷会社インターハーベスト社も 1981 年、サンワールド社によって買収され、サンハーベスト社に改名された。しかし、労働争議と不安定なレタス価格が続いたため、サンワールド社は 1 年足らずで野菜部門から撤退することになった⁷⁾。

一方、バッドアントル社は日本軍の真珠湾攻撃の後、日本人家族の土地の処分を政府からまかされて 1943 年に創設されたものである。強制収容から帰った者の中にはタニムラ氏のように土地を返還され、同社に野菜を供給してきた者も多い。1949 年に野菜の冷凍技術の革新をはかり、野菜の出荷業者としての地位を確立した。

このバッドアントル社は 1971 年にダウケミカル社から資本参加（6.6%）を得ていたのであるが、1978 年にハワイ生まれの多国籍食品会社キャッスルアンドクック社（以下 C&C 社）に買収された（図 5）。同社は 1932 年にハワイのパイナップル産業に資本参加したが、その会社は食品であるパイナップル缶詰にドールというラベルを

使っていた。このドールラベルが品質もよく知名度もあったので、スタンダードフルーツ社を買収しバナナ産業に参入した後も、C&C 社はその食品にドールブランドを使ってきた。したがって、1978 年にバッドアントル社を買収後も野菜の商品名は「Bud of California from Dole」とされた。C&C 社は 1986 年から生鮮果物を扱う部門をドールフレッシュフルーツ社に、1989 年から生鮮野菜を扱う部門をドールフレッシュベジタブル社に委ね、商品名もすべて 1986 年に商標登録したドール名となった。1990 年にカット野菜とサラダ野菜の加工を開始し、1991 年 C&C 社は食品部門のドール総合食品社と建築リゾート開発部門の C&C 社に分離したことから、前者の野菜部門となった。

ドールフレッシュプロデュース社はサリナスバレーのソレダッドにカット野菜のサラダ工場を、マリーナ地区に貯蔵・出荷施設を持っている。また、全米を視野に入れアリゾナ州のユマとオハイオ州のスプリングフィールドにサラダ加工工場を運営している。前述のようにドール社は野菜生産農場メリル社と契約取引しているが、買い付けする野菜も多いという。カット野菜はソレダッドでサラダ製品にされるが、余剰はマリーナの貯蔵施設に保管され、必要に応じて国内および国外に出荷される⁸⁾。

2) 野菜出荷業からサラダ加工業へ ーフレッシュエクスプレス社ー

1980 年代には野菜は大都市の生鮮市場よりスーパーマーケット、レストランなど業務用に供給する割合が高くなった。野菜の出荷業者は、単なる生鮮野菜の出荷からより付加価値の高いカット野菜、パッケージサラダ等の即席生鮮野菜パックに加工するサラダ加工業者に転換していった。その代表は、図 5 に示したように、ブルースチャーチ社のフレッシュエクスプレス社への転換であろう。ブルースチャーチ社のロッド・テイラー氏はホイルプール社と共同で食品産業の環境制御を開発するトランスフレッシュ社を 1960 年代の半ばに設立した。周知のように環境制御とはバナナやリンゴを貯蔵するのに使われてきた方法

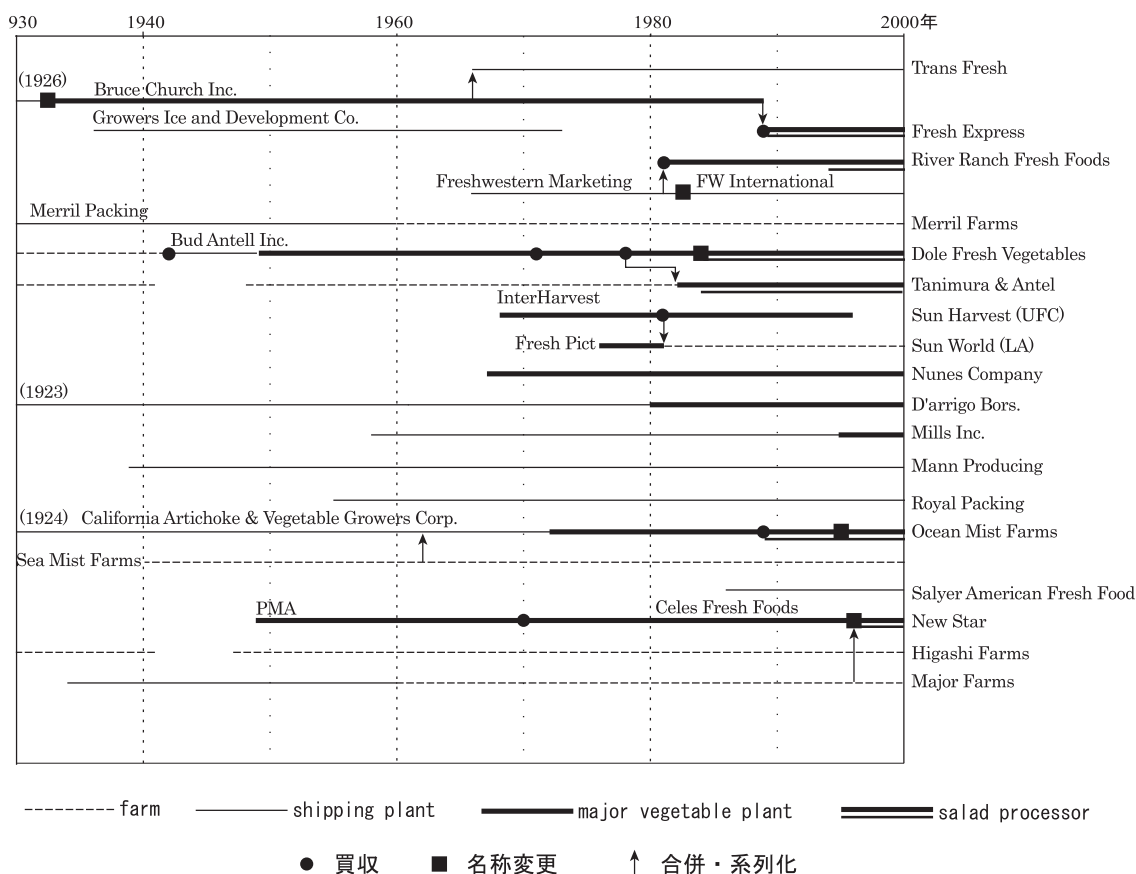


図 5 野菜の出荷業者・サラダ加工業者の系譜。
Dorel (1978), Breschini *et al.* (2000) および聞き取りにより作成。

Fig. 5 Chronology of vegetable shippers and salad processors.

で、炭酸ガスの濃度を高めることで果樹や野菜の呼吸量を低下させて鮮度を保つ方法である⁹⁾。トランスフレッシュ社はレタス、ニンジン、キャベツ等の鮮度を保つ包装フィルム、分子レベルの環境制御を可能にした「呼吸フィルム」の開発で特許を取得した。この包装フィルムの開発が野菜の鮮度を保ちながらカットサラダの提供を可能にした。すなわち、この新鮮貯蔵法が1989年、カット野菜をブレンドしたパッケージサラダ「フレッシュエクスプレス」をスーパーやレストランチェーンに提供するフレッシュエクスプレス社の誕生につながったのである。

このカット野菜はアメリカ社会の消費者に歓迎

され、1992年にはサラダ事業が前年の倍増をみたので、1994年にサラダ加工工場をサリナス郊外に新設した。この新工場を中心に、1996年にジョージア州のアトランタ工場を加え、現在ペンシルヴェニア州のグリーンキャッスル、コロラド州のコロラドスプリングズ、イリノイ州シカゴのサラダ加工工場では消費者ニーズに答える品質と鮮度のよい多種類のサラダ製品を製造している。同社はウォルマート、ラルフなどのスーパーマーケットをはじめ、マクドナルド、ピザハット、KFC、タコベル、バーガーキング、サブウェイなどに野菜を供給しており、年間売上高が60億ドルに達するアメリカ最大のサラダ供給会社と

なった。ところが、このアメリカ最大の生鮮野菜の加工会社は2001年10月、パフォーマンス食品グループによって約3億ドルで買収された。その年から同社は「われわれの事業はもはや農耕ではなくて、ブランド製品を売る商売なのだ」と宣言し、野菜生産から撤退し、原料を野菜生産者から購入することになった。

同じブルースチャーチの系譜を引くものとしてリバーランチ社がある。同社はフレッシュエクスプレス社より早く1981年に成立したものであるが、現在イギリスのストークポッジに本拠のある多国籍食品企業であるアルバートフィッシャーグループの一部となっている。同社はサリナス市の工場に加え、インペリアルバレーのエルセントロにサラダ加工施設を有し、40の栽培業者と契約して15,000エーカーの野菜を確保している(Breschini *et al.*, 2000)。例えばインペリアルバレーのエルセントロに事務所のあるヴェッセイ社はその契約栽培者で、隣接するリバーランチ社のサラダ工場にレタスやブロッコリーなどを供給している。しかし、同社はフレッシュキスト社にも同様に供給し、アーティチョークはオーシャンミスト社に出荷している¹⁰⁾。

3) 契約野菜栽培地の広域的展開

1. タニムラアンドアントル社 (T&A 社)

バッドアントル社は、前述のように1978年にドール社に買収された。買収された後の5年間は同業を再開しないという条件が解除された1982年、バッドアントル社に野菜を供給していたジョージ・タニムラ氏はバッドアントル氏とタニムラアンドアントル社(以下T&A社と略)を設立した(図5参照)。日系二世のジョージ・タニムラ氏は1930年代に父親の農場でレタスの間引きをしていたことをよく記憶している。世界恐慌の最中に父親が死亡し、タニムラ一族はスプレックルズに移り、家族農業を行った。農業が安定した時、真珠湾攻撃があり、太平洋岸に在住していた12万人の日本人と同様、サリナスの収容施設に強制連行され、最終的にアリゾナ州のホストン収容所に収容された。収容所から解放された時、ジョージ・タニムラは何かも失ったことを



写真 4 T&A 社の本社事務所と野菜畑 (2004 年 7 月 22 日)。

かつてのスプレックルズ社の甜菜畑は、豊かな野菜畑に変わった。

Photo 4 Headquarter of Tanimura & Antle and its lettuce field in Spreckels.

知り、一からやり直した。彼は最初ギルロイに、次いでワトソンビルに移った。1948年サリナスバレーのアロマスに家つきの20エーカーの土地を購入し、青ネギとレタスの栽培を再開した。勤勉な努力の結果、タニムラ農場は農地を購入したり、契約して経営規模を拡大した。1950年代からタニムラ兄弟は、優れた品質のレタスを、専らバッドアントル社に供給していた。

1982年にT&A社が設立されたのは、以上の経緯からも明らかのようにタニムラ家とアントル家の50年以上にわたる相互信頼と親密なつきあいの結果なのである。同社の経営理念は、雇用者、栽培者、販売店、供給者、消費者を家族として遇することである。タニムラ氏の高品質野菜の生産技術とアントル氏の加工・販売戦略が結びつき、同社は急成長を遂げた。同社の製品はサラダタイム、ファーストンフレッシュ、クールカットのブランドでスーパー、外食産業等に供給される。

T&A社の事務所は、本社と野菜加工施設のあるサリナス(写真4)をはじめ、オックスナード、トレスピコス、アリゾナ(ユマ:工場もある)、メキシコ(中央部)およびカナダのモントリオールにあり、従業員は2,500人に上る。また、サリナスバレー(18,000エーカー)とユマ

表 2 サラダ加工会社の野菜（契約）栽培面積。

Table 2 Contract acreage of vegetable cultivation in Salinas and other valley by salad processors.

Vegetable shipper	Salinas	Huron	Imperial	Yuma	Others	Total	Main Brands
Tanimura & Antel	18,000	4,500	—	18,000	2,500	43,000	Salada-Time,
D'Arrigo Bros.	16,000	1,400	1,000	7,000	600	26,000	Andy Boy
Mills Inc.	9,000	1,000	1,500	2,000	1,000	13,500	
Nunes Company	6,000	500	—	4,500	1,000	12,000	Foxy

聞き取りによる。

Data from interviews with vegetable shippers.

バレー（18,000）を中心に、所有地および契約地はヒューロン（7,000）とオックスナード（4,000）などを合わせ 43,000 エーカー強に上る（表 2）。これら広大で肥沃な農地で、年間を通じて高品質野菜を生産している。T&A 社はアメリカ最大のレタス生産者・出荷業者であるので、レタス（玉レタス、ロメイン、グリーンボール、サラダ菜、サニーレタス）をはじめ、セロリー、カリフラワー、ハウレンソウ等を処理工場を通じてアメリカ合衆国、カナダおよび世界中に出荷している。一般に、サリナスバレーからニューヨークなどの東部市場には大型保冷車で 5 日かかるというが、ユマからモントリオールへは運転手の交代で 3 日で運ぶという¹¹⁾。

サリナスバレーの 18,000 ～ 19,000 エーカーの延べ面積のうち、T&A 社の所有地の占める割合は 50% 強に上る（表 1 参照）。しかも、T&A 社の 18 耕地のうち、5 か所は 2,200 エーカーに及ぶ有機野菜を栽培している。これは有機栽培の老舗であるアースボンド社と提携のもとで行われる。有機野菜としては玉レタス、葉レタス、カリフラワーが 200 エーカー以上栽培されているが、ブロッコリー、セロリー、ハウレンソウも 180 エーカー以上、マスタード、白菜、青梗菜、エンダイブ、フェネル、ケール、パセリー、スイスチャド、チコリー、マスタードも 50 ～ 100 エーカー栽培されている。これら多様な野菜はサラダ加工した際に、彩りや香りを付加するものである。

2. ダリーゴ社

これまでみてきたようにサラダ加工会社は、サラダの周年出荷や生産品目の多様化のため、サリナスバレーばかりでなく南カリフォルニア州やアリゾナ州に契約栽培地を確保してきた。ここではダリーゴ社を事例にその広域展開の様相をみよう。ダリーゴ家は 1910 ～ 1912 年頃にイタリアからボストンに移住し、1916 年頃にボストンの青果物卸売市場で青果物取扱業を始め、イタリア系野菜を中心に商売した。通年の青果物の供給を求めて、兄弟の一人が 1923 年頃にカリフォルニア・デルタの近くのプレントウッドで農業を開始し、ブロッコリーとセロリーを生産した。こうして、ダリーゴ社はブロッコリーの最初の商業生産者となった。1950 年代には、本社はサンノゼに置いていたが、1961 年にサリナス市に移した。今日でも、ダリーゴ一族は、ボストン、ニューヨーク、サリナスで農業関連会社を経営しており、互いに株式を所有しあっている。したがって、この会社の正式名はカリフォルニアダリーゴ兄弟社（D'arrigo Brothers Company of California）となっている。

ダリーゴ社がサリナスバレーで経営している 19 か所の耕地には、延べ 19,089 エーカー（2003 年）の野菜が栽培されている。先のゴンザレスの土地利用でみたように（図 3 参照）、サリナスバレーは 2 期作、2 毛作地域なので、土地経営面積はその半分である。しかも、ダリーゴ社は土地経営面積の半分、約 4,000 エーカーを所有する。全体としてはレタスが最大の面積を占める

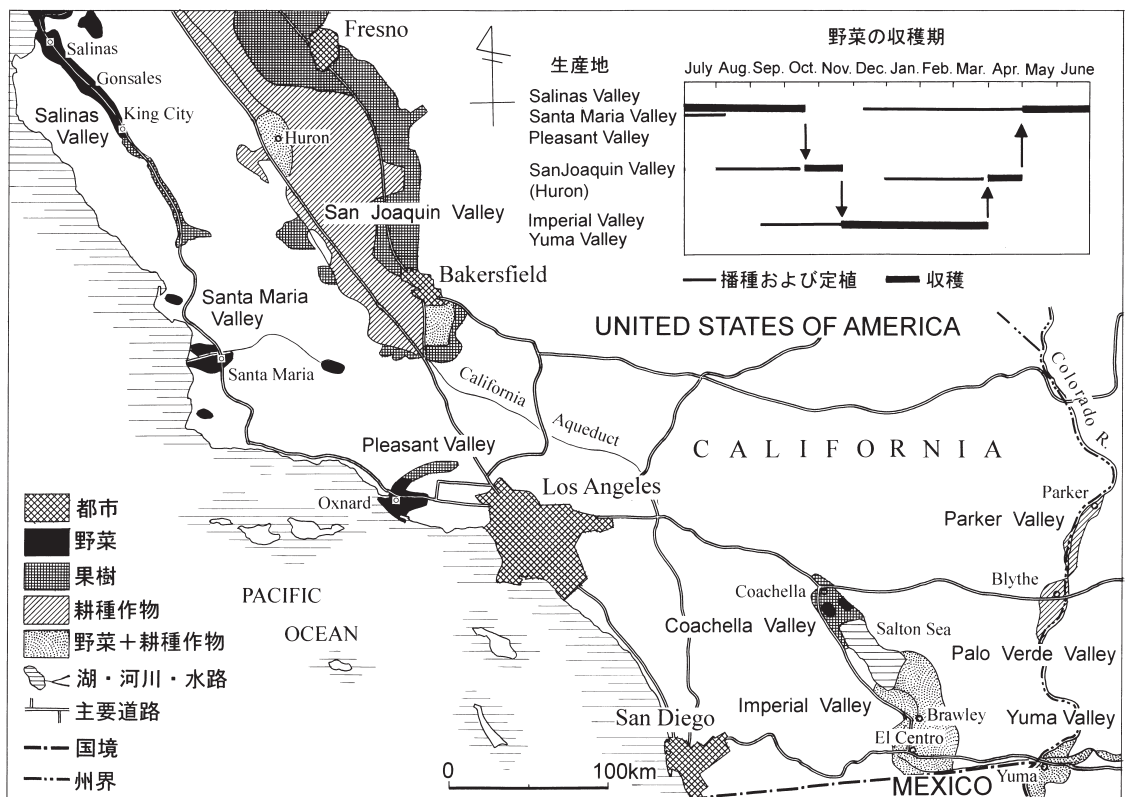


図 6 レタスの産地別季節別収穫期。

野菜産地は 1994 年の空中写真 (TerraServer, USA) を基に各郡で作成されている GIS Crop Mapping 等を参考に現地調査を加えて作成。

Fig. 6 Lattuce harvest in the regional context.

が、ブロッコリーの生産に力を入れてきただけにブロッコリーとラビニで 7,336 エーカーも栽培している。また、サボテンとその実の生産にも特徴がある (表 1 参照)。ところで、ダリーゴ社の延べ野菜栽培面積は 26,000 エーカーに及ぶ。このうち、サリナスは 16,000 エーカー、ユマバレー (7,000)、ヒューロン (1,400)、ブローレイ (1,000) である (表 2 参照)。また、野菜の生産を地域別にみると玉巻きレタスの生産は、5 月～10 月 20 日はサリナス、10 月 20 日～11 月 20 日はヒューロン、11 月 20 日～4 月 1 日はユマバレー、4 月はヒューロンに戻り、5 月からは再びサリナスバレーに戻るといった広域的循環形態を採っている (図 6)。ブロッコリーの場合は、4

月 1 日～11 月末までがサリナス、11 月末から 3 月末までがユマだという¹²⁾。なお、図 6 には野菜産地を野菜専作地 (野菜) と野菜輪作地 (野菜 + 耕種作物) に区別して示しておいた。すなわち、前者は海霧の影響を受けるサリナスバレーなどである。後者は、サンホワキンバレーのヒューロンやインペリアルバレー、ユマバレーであり、レタスなどの野菜が綿花、アルファルファ、小麦などの耕種作物の長期的輪作体系の一部に組み入れられているからである。

また、ダリーゴ社の冬季の主力はブローレイからユマへと移動した。農地の賃貸料はインペリアルバレーに比べてユマが 15% 程度高いが、移動の要因は企業環境にある。カリフォルニアでは農

業に関する規制が厳しく、殺虫剤の使用などに関して、合衆国農務省の基準に上乗せした厳しい基準が設けられている。一方、アリゾナでは国の最低限の基準しか課せられていない。このため、カリフォルニアでは収穫から次の作付けまで2週間のインターバルが必要だが、アリゾナでは収穫の1週間後に次の作付けを開始することができる。さらに、失業保険に関して、カリフォルニアでは失業した翌日から保険金が支払われるが、アリゾナでは1週間の審査期間が必要である。このように、企業にとっては規制の緩やかなアリゾナ州の方がカリフォルニア州よりメリットが大きい。

ダリーゴ社は、冷蔵会社のユニークル社に30%出資している。この会社には同じくミルズ社が30%、ベンガード社が20%、その他の会社が20%出資している。ヒューロンのヒューロンクーリング社とユマのラーソンクーリング社にも、出資比率は若干異なるものの、同様に投資している。同社は野菜の出荷業者であるが、半サラダのような付加価値の高い商品（Andy Boy）を出荷している。おもな市場は関連会社のあるニューヨークなどの東部とカナダである。

3. ヌーネス社とミルズ社

一方、フォクシー、タビーのブランドで野菜やサラダをアメリカの東部市場（40%）に出荷しているヌーネス社はサリナスバレーに6,000エーカー、ユマに4,500エーカー、オックスナードに1,000エーカー、ヒューロンに500エーカーの合計12,000エーカーに契約野菜栽培地を有する。サリナスバレーでは、レタスが4月～10月末に、ブロッコリー・カリフラワーが3月～11月に、セロリーが6月～11月に収穫される。ユマでは、レタス、カリフラワー、ブロッコリーが11月～3月に収穫され、ヒューロンでは、レタスが10月～11月と3月～4月に収穫される。また、オックスナードでは、11月中旬～6月中旬にセロリーが栽培される。同社は野菜栽培を多地域で展開するため、冷蔵施設をユマ、オックスナード、ヒューロンに所有している。しかし、レタスの加工はサリナスの工場ですべて行われるため、加工用レタスはユマからサリナスに輸送され

る¹³⁾。

さらに、ミルズ社はサリナスバレー（9,000エーカー、所有地と借地が半々）、インペリアルバレー・ユマ（3,500エーカー、借地）、ヒューロン（1,000エーカー、借地）、メキシコのソノラ州サンルイス（1,000エーカー、所有地）に合わせて13,500エーカーの野菜契約面積を有する。借地契約は3年契約が中心だが、1年や5年の契約も行われる。1970年代にはブローレイが中心だったが、1980～1990年代にユマでの栽培が盛んになった。メキシコのサンルイスの農場では、青ネギが中心だが、ほかにブロッコリー、パセリー、リーク、シエントロなどが冬季に栽培される¹⁴⁾。

4) 請負耕作会社と外国人労働者

先にサリナスバレーの農業労働者が当初から低賃金で働く中国人や日本人などの外国人労働者に依存していたことを示したが、その後、彼らに代わって農業労働を担うようになったのはフィリピン人やメキシコ人であった。最近ではメキシコ系労働者への依存度が特に高い。その基盤には請負耕作という形態とメキシコへの近接性がある。

例えば、ミルズ社は直営農場による生産のほか、サリナスの5生産者、ブローレイの3生産者、ヒューロンの1生産者を傘下に納めている。栽培する作物によって取り決めが行われ、一般的には、ミルズ社が50%、生産者が25%、収穫会社が25%の取り分である。ミルズ社は栽培法、生産スケジュール、製品に関する注文を出す、種子などは生産者が負担する。ミルズ社はサリナスバレーに傘下の収穫請負会社アドベ出荷会社（49%出資）を有している。圃場の管理チームは10人程度で、レタスの収穫期に合わせサリナスからヒューロンを経てインペリアルバレーへと移動する。帰りはその逆で循環型の勤務形態を採っている。

収穫作業に農業労働者を使うには収穫機械、収穫物を工場または冷凍保管庫まで輸送するトラック4台、トイレなどを備える必要がある。そのようなオペレーターに加え、収穫には30人程度の労働者が必要となる。これらはサリナスバレー



写真 5 レタスの収穫風景—インペリアルバレーのブローレイ地区（2001 年 12 月 23 日）。
国境地帯にあるこの温暖なインペリアルバレーでは、専用バスで通うメキシコ人が冬季にレタス等の収穫作業に当たる。

Photo 5 Harvesting of lettuce by Mexican workers in Brawley, Imperial Valley.

では殆どメキシコ系アメリカ人であるが、ユマやインペリアルバレーではメキシコ人を使う。例えば、ブローレイにあるジャックブラザーズ会社は栽培請負企業であるが、別会社で収穫請負企業のイージーレイバーアンドハーベスティング社を営んでいる。この会社は 43 人乗りと 50 人乗りのバスを十数台所有しており、毎朝メキシコのカレキシコに行って、必要な数の労働者を調達する。労働者への賃金は、時給あるいは出来高払いで支払われる。時給の場合は、最低賃金（時給 6 ドル 25 セント、ただし、2002 年 1 月 1 日からは 6 ドル 75 セント）か、それに若干がプラスされる。出来高払いの場合は、箱当たりの金額が取り決められ、収穫された箱の数に乗じて労賃が支払われ、労働者はそれを山分けすることになる。収穫作業にあたる農業労働者は 16 人から 32 人までさまざまだが、平均すると 20 人である。しかも多くは、ラテン音楽を高らかに鳴らして作業する常連のメキシコ人労働者である（写真 5）。カリフォルニアの野菜生産とアグリビジネスにとって、今も昔も外国人労働者は不可欠な存在なのである。

V. むすび

サリナスバレーのレタス栽培は、1920 年代に氷づめした貨車でニューヨークに輸送することに

よって盛んになった。ここのレタスは、寒流の流れるモンレー湾から移入する冷涼な海霧、つまり夏涼しい気候を活用して栽培されるものであり、サリナスバレーは酷暑のセントラルバレーとは対照をなす海岸部夏野菜地帯の中核地帯を形成している。しかも、当初から規模の大きな野菜生産者が出荷業者として活躍し、アグリビジネスとしての彼らが野菜生産をリードしてきたといえる。

サリナスバレーはアメリカ最大の野菜生産地となる一方、1930 年代にはインペリアルバレーやユマバレーも冬季に野菜を生産する冬野菜の産地となっていた。つまり、カリフォルニア州南部やアリゾナ州は、夏野菜の産地であるサリナスバレーを補完する地域になった。さらに、野菜の運送手段が鉄道からトラックに代わった 1970 年代には、1920 年代に始まった気候の南北差を利用した野菜の周年出荷が本格化した。夏野菜産地であるサリナスバレーと冬のユマ・インペリアルバレーの端境期をねらい、セントラルバレー西側のヒューロンに新しい野菜産地が形成されたのである。最近ではアメリカ国境に接するメキシコでも野菜栽培が始まった。

1960～1970 年代にはサリナスバレーの出荷業者が大きな資本に買収された。1968 年、ユナイテッドフルーツ社は地元のいくつかの野菜出荷

業者を買収してインターハーベスト社を設立した。このインターハーベスト社とバッドアントル社はアメリカの野菜業界で1・2位を占める会社に成長していた。ところが、1978年にはこのバッドアントル社がハワイ生まれの総合食品会社C&C社（現ドール）に買収された。このような大資本の野菜産業への進出の背景には、スーパーマーケットの普及、レストランチェーンなど外食産業が発展し、野菜栽培の周年化、多種類の野菜の供給が必要不可欠になったことがあげられる。

1980年代に入ると生鮮野菜としての全量出荷に加え、カット野菜、つまり家庭用、業務用のサラダ用野菜の需要がのび、出荷業者をサラダ加工会社に変革させることとなった。したがって、サリナスバレーの野菜出荷業者・サラダ加工会社は多種類の野菜を扱いながらも、レタス、ブロッコリー、アーティチョーク、アスパラガス、ニンジン、ニンニク等に特化するものも現れた。

また、当初から外国人労働力に依存してきた野菜栽培は依然としてヒスパニックやメキシコ人労働者に依存している。そして生産地をメキシコなど外国に依存するばかりでなく、製品の販売先としてもカナダや東南アジアなどの外国市場への輸出も見過ごせない地位を占めるようになった。

アメリカ合衆国の農業と農業地域を論ずる場合に、農業の工業化とアグリビジネスについての理解が不可欠であることはよ認識されていることであるが（Vogeler, 1981）、具体的な研究事例が少ないのが現状である。それは、家族農場の調査に比べると企業相手の調査は容易でないこと、企業の合併・吸収のスピードが早いこと、多大な労力が必要なこと、農業センサス等の統計だけでは現実の姿が理解できないこと、そしてアメリカ合衆国の農業地理学研究者が現地調査に基づいた詳細な議論を殆ど放棄してしまったことに起因する。本稿で報告したサリナスバレーを中心としたレタス生産の事例は、カリフォルニアにおける企業的・合理的な農業生産に光を当て、そのダイナミックな展開を記述、分析することによって、アメリカ農業の一つの側面を明らかにしたものである。農業生産大国のアメリカ合衆国を理解するために

は、農業政策、大手資本、国際市場の動向を理解する必要があることはもちろんであるが、同時に本稿で提示したような農業地域の詳細な分析が不可欠である。私たちは今後もフィールドワークに基づいた調査研究を継続していく所存である。

謝 辞

本稿の作成に当たり、モントレイ郡の農業委員会および改良普及所の方々にお世話になった。また、タニムラアンドアントル社の国際部長チャック・シュライバー氏をはじめ、ダリーゴ社、ヌーネス社、ミルズ社等の国際部長、メルルフームズ社等にお世話になった。また、インペリアルバレーの野菜出荷業者ヴェッセイ社や請負会社ジャク社にもお世話になった。さらに本調査の一部には文部省科学研究費基盤研究B（2）「日本における農作物の転移・拡散に関する実証的・生態地理学的研究」（代表：斎藤 功, No.11480015）、基盤研究B（2）「移民の適応戦略と前適応からみた移民社会・ホスト社会の地域生態学的比較研究」（代表：矢ヶ崎典隆, No.14380024）および基盤研究B（2）「日本農業の担い手からみた農業維持システムの地域動態的研究」（代表：田林 明, No.16300291）の一部を使用した。製図をお願いした筑波大学地球科学系の技官、宮坂和人氏とともに、篤くお礼申し上げます。

注

- 1) スプレックルズ工場はモントレイ郡に加えて、サンタクルーズ、サンベニト郡を合わせると、実質的に66,000エーカーを支配していた（Anderson, 2000, 79）。また、同社は1970年には社名をアムスター社に変更し、1981年に工場は閉鎖された。スプレックルズ砂糖の販売権はインペリアルバレーにあるホーリー製糖会社に受け継がれ、現在でもなじみ深いブランドとしてカリフォルニア州で販売されている。
- 2) サリナスバレーで成功している日系の花卉栽培者にはニノミヤ、クリモト、イケダ、ヨトミ、ヨシダ、マツイ、ミナミ、イチゴ栽培にはフジイ、ヤマグチ、野菜栽培にはタニムラ、ヒビノ、ヒガシ、ミヤサカがいる。
- 3) モントレイ郡公式ホームページのうち、Annual Crop Reportによる。以下、野菜栽培面積はこの統計による。なお、1955～1965年の間、ブロッコリーなどの野菜の栽培面積は記載されていないが、生産量や出荷量から面積を推定した。
- 4) アメリカンフルーツグロウーズ社が組織されたのは1917年である（本社はペンシルヴェニア州ピッツバーグ）が、その前身は1907年から進出していた。同社はブローレイに本拠を置き、1,500エーカーのレ

タス、2,500 エーカーのキャンターローブと被覆作物として1,000 エーカーのアルファルファを栽培していた。従業員は60人で、収穫期には900人が雇用されるという(Tout, 1931)。

- 5) V&V ファームズ社の耕地でレタスの収穫時期を吟味していたニュースター社の農事監督者からの聞き取りによる(2001年8月6日)。また、同年の12月19日にはV&V ファームズ社への聞き取りを実施した。
- 6) メリル社の財政担当責任者のグレン・ダブリー氏からの聞き取りによる(2003年7月10日)。
- 7) サンワールド社は1976年に成立した新鮮果物・野菜会社であったが、サリナスバレーからの撤退後、カリフォルニア州オレンジ郡のアーバインを拠点に、果樹の生産・販売を続けていた。しかし、1989年にセントラルバレーで活発な活動を続けていたスベリオ農産社(40,000 エーカー)を買収して、本拠をベーカーズフィールドに移した。1996年カディズ社に買収されたが、サンワールド社の名前で経営を続けている。
- 8) 一般に、ドール社はブロッコリーの1番取りは「輸出用王冠 export crown」として日本への輸出に向けられ、2番取りは「輸出用」もあるが、多くは3番取りとともに「ゴム束」にされ、国内用に向けられるという。ドールフレッシュプロデュース社にブロッコリーの種子を供給しているサカタ種苗アメリカ社のトシ・フルキ氏の教示による(2003年7月8日)。
- 9) 環境制御の簡易 AC 貯蔵技術は、日本では富有柿の鮮度保持などに使われている(斎藤・林, 1993)。
- 10) ヴェッセイ社のエリック・ポンパ氏によるとニンニク生産に特化している同社も、ヴェッセイなどのブランドでメキシコ、ヨーロッパ、カナダに輸出している。なお、リバーランチ社の子会社フレッシュウェスタンインターナショナル社は、シンガポール、マレーシア、台湾など東南アジアへのブロッコリーの最大の供給者であるという(2001年12月22日)。
- 11) タニムラアンドアントル社の国際販売部長チャック・シュライバー氏によれば、T&A社はモンリオール工場を新設したことで、カナダへのレタスの最大の輸出業者となり、そのシェアは48%に達するという。アジアへはレタスとブロッコリーが中心であるが、1位が香港、2位が台湾、3位がシンガポールで、その他にもマレーシア、中国、日本が市場である。日本では、三菱商事、チキータ、東京築地のマルカ、松屋が顧客であるという(2001年12月17日)。
- 12) ダリーゴ社の副社長ジェームズ R. マナセロ氏によれば、15～20年前には、ブロッコリーはユマで8週間栽培し、次にインペリアルバレーで6週間栽培し、再びユマに戻るという作付けパターンが存在したという(2001年12月18日)。
- 13) スネス社の国際販売部長デニー D. スチーブンス氏によると同社はヨーロッパ、西アジア、アジアなど、世界の30か国に輸出している。日本へは、ブロッコリー、アスパラガス、ロメインレタスを輸出するという(2001年12月17日)。

- 14) ミルズ社の副社長ディビッド G. ミルズ氏からの聞き取りによる(2001年12月18日)。

文 献

- Anderson, B. (2000): *America's Salad Bowl: An Agricultural History of the Salinas Valley*. Monterey County Historical Society Publication
- Breschini, G., Haversat, T. and Gudgel, M. (2000): *10,000 Years on the Salinas Plain*. Heritage Media Corp.
- Dorel, G. (1975): La penetration du grand capitalisme dans l'agriculture des Etats-Unis, le corporate farming. *Travaux de l'institute de Geographie de Reims*, 21-22, 47-72.
- Dorel, G. (1978): La laitue aux Etats-Unis: Complementarite des espaces productifs et strategie des firmes de l'agri-business. *Annales de Geographie*, 87, 129-151.
- Federal-State Market News Service, USDA (1975): *Marketing Lettuce from Salinas-Watsonville-King City and other Central California Districts 1975 Marketing Season*.
- Fitz-Simmons, M. (1986): The new industrial agriculture: The regional integration of speciality crop production. *Econ. Geogr.*, 62, 334-353.
- Gregor, H. (1969): Farm structure in regional comparison: California and New Jersey vegetable farms. *Econ. Geogr.*, 45, 209-225.
- Jelinek, L. (1979): *Harvest Empire: A history of California Agriculture*. Boyd & Frase.
- Raup, H.F. (1936): Land use and water supply in southern California: Market gardens of the Palos Verde Hills. *Geogr. Review*, 26, 264-269.
- 斎藤 功 (1982): 日本における夏ダイコン栽培地域の展開とブナ帯. *人文地理学研究*, 6, 181-212.
- 斎藤 功 (1991): やませ被害地域における花卉栽培の発展—岩手県安代町のリンドウ栽培を事例として. *地域調査報告*, 13, 39-52.
- 斎藤 功・林 秀司 (1993): 筑後川中流域におけるカキ栽培の発展と貯蔵技術の革新—浮羽町を中心として—. *人文地理学研究*, 17, 87-105.
- 斎藤 功・矢ヶ崎典隆 (1998): ハイプレーンズにおけるフィードロットの展開と牛肉加工業の垂直的統合—カンザス州南西部を中心として—. *地学雑誌*, 107, 674-694.
- 斎藤 功・仁平尊明・二村太郎 (2000): カンザス州南西部ハスケル郡における穀作農業の展開と借地農. *人文地理学研究*, 24, 99-129.
- 斎藤 功・仁平尊明・二村太郎 (2001): カンザス州におけるグレインエレベーターの地域的展開と垂直的統合. *地理学評論*, 74A, 661-668.
- Steinbeck, J. (1955): *East of Eden*. スタインベック, J. 著, 野崎 孝訳 (1972): エデンの東1～4. 早川書房.
- Tout, O. (1931): *The First Thirty Years*. San Diego.
- Vogeler, I. (1981): *The Myth of the Family Farm*:

Agribusiness Dominance of the U. S. Agriculture.
Westview Press.

矢ヶ崎典隆 (1990): アメリカ合衆国における農業地域の
変貌. 横浜国立大学人文紀要第一類, **36**, 1-17.

矢ヶ崎典隆 (1993): 移民農業—カリフォルニアの日本
人移民社会. 古今書院.

矢ヶ崎典隆 (2000): アメリカ合衆国アーカンザス川流

域の甜菜糖産業. 歴史地理学, **42**(4), 1-22.

矢ヶ崎典隆・斎藤 功 (1992): ブラジル北東部ゴイア
ナ川流域における製糖工場の展開とサトウキビ集荷
圏の空間組織. 地理学評論, **61A**, 17-39.

(2004 年 11 月 1 日受付, 2005 年 4 月 4 日受理)